

報 會



1964年2月

231

日本山岳会

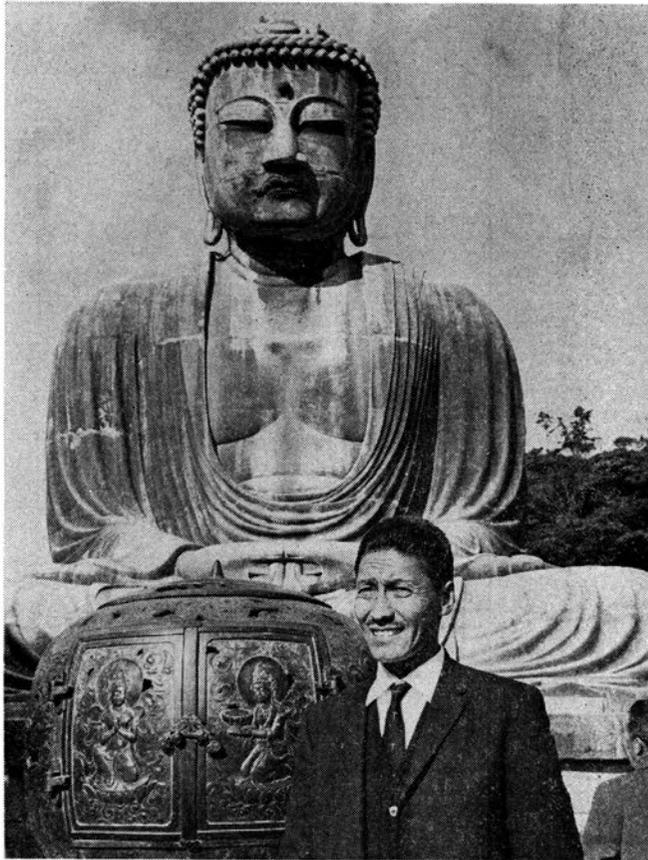
テンジン氏の来日

山崎 安治

マウント・エヴェレストの初登頂者、シエルパのテンジン・ノルゲイ氏が外務省の招待で来日し

受けられた折井、高橋進、松田氏らの苦心は大変なものがあったと推察する。また日高前会長をはじめ

印度大使館、プレス関係の挨拶まわりをし、秩父宮妃殿下とは一時間にもわたって話はずんだという。夜は七時半からNHKの「私の秘密」に出たが、これはすぐ当ってしまった。
四日は、三田、金坂、小方、高橋照氏らの案内で鎌倉、江ノ島に



—鎌倉・大仏前のテンジン氏— 木村勝久 撮影

た。二月二日から十三日までの短かい期間だったが、直接話しあう機会を持ったことは得難いものがあった。
二月二日午後八時五十分、JAL機で羽田到着以来、スケジュールの作成や、実際の接待役を引き

め、榎、松方、三田、渡辺といったお歴々が熱心に案内役を買って出られた。二日の夜はひとまず神田の山の上ホテルに到着し、三日から忙しい日程に入った。
三日は、日高、松方、榎、折井氏らが同道で皇居で記帳をすませ

本山岳会主催の歓迎レセプションが開かれ、九十名ほどの会員がかけつけ、大歓迎パーティとなった。新製品のピッケルを贈られるところや、ハントの「エヴェレスト登頂」、アルマンの「マン・オブ・エヴェレスト」にサインを求

- 本号目次
- ・テンジン氏の来日……………一
 - ・テンジン・ノルゲイ氏
 - ・関西の旅……………三
 - ・第二回小集会の記……………四
 - ・黒部の今と昔……………六
 - ◆図書紹介……………八
 - ・西岡さん、さようなら……………八
 - ・吉田翁の思い出……………九
 - ◆会員通信……………一〇
 - ・西イランから……………一〇
 - ・テンジン氏関西訪問の旅に同行して……………一〇
 - ・二月の戸隠山……………一一
 - ◆会務報告……………一二
 - ・婦人部奥日光のスキー……………一二
 - ・第三回登山技術講習会……………一四
- められるテンジン氏の姿にカメラの砲列がしかれた。
五、六、七の三日間はテンジン氏が楽しみにしていたという奥日光スキー懇親会で、これは技術研究会のメンバーが案内を買って出た。同行は三田幸夫氏をはじめ、金坂、松田、片桐、高橋進、山野井、木村、山崎、これに週刊朝日のカメラマンと東京新聞の成川記者が加わり、さらに現地で交野、村井の両氏が参加した。テンジン氏の靴は特別サイズのものを用いし、スキー一式は芳賀スキーでそろえてもらい、その他のごまごまとした衣類や道具は片桐氏が用意してくれた。
五日午前九時二十分三台の車に分乗して体協前を出発する。宇都

(次頁へ)

宮県庁で鈴木観光課長、渡辺泉山岳連盟会長らに迎えられて昼食後日光市役所に挨拶に立寄り、日光東照宮を見物した。宮司の案内で一般観光客にまじり、陽明門から東照宮の内部までくまなくみてまわった。金坂氏が宮司をヘッド・ラマといつて紹介したらすぐに了解し、ラーサの宮殿と作りかたがよく似ているとテンジン氏は感心していた。

市役所から提供を受けた小型バスに乗りかえ、予定より大分遅れ午後五時三十分南間ホテルに到着した。いろは坂あたりからすっかり白一色の世界となる。

夕食は全員広間で会食した。普通の旅館なみの日本料理だったが、サシミからテンブラ、塩カラまではしをつけていた。アルコールはビールとウイスキーを少量たしただけでごくひかえ目だった。チャワンという言葉に非常な興味を示し、チベット語で数字の一、二、三、四……が日本語と発音が似ていることだの、昨秋アメリカに招待された帰途日本に立寄った甥のナワン・ゴンブがヒマラヤ登山学校の教師としていまボンベイで岩登りの技術をみがいでいることなど話はずんだ。

待望の六日は好天で、テンジン氏は十分スキーを楽しんでいた。スキーは一九四〇年カシミールではじめてというキャリアの持ち主で、昨年の冬はイタリアで十日間

ほどみっちり滑り、その間肋骨を四本折り、足をくじいたというだけあって、彼のスキーはスピードに乗りシテム・クリスチャニア

滑りまくっていた。感想を聞くとなかなかよいスキー場だとはめていた。昼食は村井、交野氏の案内でゲレンデの下の鬼林荘でとつ



——奥日光でスキーを楽しむテンジン氏—— 木村勝久 撮影

をたくみにこなす豪快なものだった。ゲレンデも手ごろなスロープで、ころんだのはわずか三回だけ。リフトに何度も乗って午前中

た。皆なでモリソバを注文し、説明をききながらテンジン氏もハシをつけたが、二口、三口しただけで、これは口にあわなかったら

い。午後は連日の歓迎攻めにきずが疲れが出たのか、二度ばかりリフトに乗っただけで三時前、早目にホテルへ引き上げ休養をとった。

夕食は一段と話に熱がはいった。服の上からドテラを着込み、チベット服と同じだとすっかいかつろいだテンジン氏は、皆と違ってしょにブタなべを囲み、ビールのコップをかたむけながら皆の質問に答えた。テンジンという名前の意味は、多くの僧院に住む信者だということを知り、説明し、貰ったサインのスペルがNが二つあるように書かれていたのでNは一つか二つかどうか本当かと聞くことと一つだとはっきり聞いていた。山野井氏はこの春立大が遠征するバルンツェのこと、成川氏は早大が明年やる予定のローツェ・シャルについて一所懸命質問した。イムジャ・サイドからのローツェ・シャルは急なので雪崩の危険はきわめて多いが、完全に登頂は可能であると、持ち出された写真にルートを示しながら断言した。ローツェに日本隊が登るとい

うのはもちろん初耳だっただけに、非常に関心を寄せ、隊の規模、メンバーなどについて逆に質問を受けた。

一九五一年テンジン氏がサードとして参加したフランスのナンダ・デヴィ登山隊についてはことに熱心に語り、ナンダ・デヴィ東

峰の登攀は、技術的にいってエヴェレストよりはるかに困難で、頂上の雪原に達するまで危険な岩登りの連続であったこと。隊長のデンプラとウイーニユが主峰から東峰へ縦走を企てその最後の姿をロングスタッフ・コルから眺めたが、二人は恐らくロープを着けずに動いており、雪庇をふみはずしてやせた山稜から墜死したのだらうといった話など、まことに生々しい迫力に富んでいた。

七日は今市から東武のロマンスカーで浅草に向い、山ノ上ホテルで旅装を改めてから午後二時三十分東京駅発の第二こたまで一路大阪へ。植さんが付添われた。午後九時大阪駅着。新大阪ホテルに入る。大阪では関西支部有志の懇談会に出席した。

九日は奈良に向い東大寺、春日神社など見物後京都に一泊。十日午後一時三十分京都発のはとで東京へ、午後七時三十分東京着、ふたたび山の上ホテルに入った。

十一日は午前十時半、日高、松方、折井氏らと東宮御所に皇太子殿下を訪問して約一時間懇談し、殿下から日本のヒマラヤ登山隊をよろしくお願するとのお言葉をいただいたという。午後は一時五十分から山の上ホテルでテンジン氏を囲むフリートークの会が持たれた。松方三郎、三田幸夫、小原勝郎、深田久弥、堀田弥一、竹節作太、交野武一、吉沢一郎、折

井健一、辰沼広吉、村山雅美、金坂一郎、大家博美、村木潤次郎、松田雄一、田辺寿、山田二郎、谷口現吉、片桐理一郎、高橋進、木村勝久、川上隆、山崎安治らの諸氏が出席し村木氏が司会をつとめた。

二月七日

第二こだまにて東京駅発、日光同行者及び渡辺副会長見送らる、名古屋駅にて同地会員諸氏より人形を贈らる。依田孝喜氏車中に訪ね再会を喜ぶ、午後九時雨中大阪到着、多数会員各位の出迎えを受く、駅頭スキー客の行列を見て盛んなるに驚く、新大阪ホテル泊。

二月八日

雨、早朝より篠田軍治、住吉仙也、梶本徳次郎三氏来訪、阪急電鉄提供の自動車二台に分乗して午前九時宿舎発、毎日新聞社訪問、立川社会部長、池田事業部長、金子編集局長の接待受く。同十一時森永乳業工場口工場見学、伊藤工場長、国島事務部長等各氏の案内にて工場見学、衛生的にして自動化されたる施設に感心する。

同十二時、宝塚に至る、同劇場にて、昼食の饗応を受けたる後観劇する。

美しき舞台と華やかなる演劇とを篠田氏の克明なる説明の勞

まず松方会長からきようはとくにヒマラヤ関係者に集まってもらったので、ヒマラヤ登山における技術上その他の問題につき話しあいたいむね挨拶があり、村木氏はこの日のテーマとして、エヴェレスト登山の諸問題、シエルパの

消息、テンジン氏からのエクスペディションに対するアドヴァイス、の三つにしばって話しを進めたいと説明があった。

このテンジン氏の関西旅行は、来日以来多忙な日程の後のことと疲労を心配したが、その様子もなく頗る元気にて、すべての風物に興味を覚え、殊に西下途中名古屋にての会員の寄せられたる好意に始る関西支部、京都大学学士山岳会及び訪問先の会社、劇場などにての温き接待に心から感謝をしておった。

により大満足。劇後女優に囲まれて興奮する。午後三時池田のダイハツ工業工場見学、小石社長夫妻はじめ各位の懇切なる案内にて、流れ作業による自動車、三輪車の続々たる生産を見て驚く、午後新朝日ビル内ナショナル電化センター見学、トランジスター・ラジオを贈らる。夕刻より関西支部主催の歓迎会に料亭本青竜に行く、藤木

に分乗午前十時ホテル発、大阪城見物の後、奈良に至り公園にて見事なる鹿寄せを楽しむ東大寺に詣でる。テ氏跪座して大仏を礼拝す。礼拝を終え法悦に堪えぬ如く満足の言葉を繰り返す。奈良ホテルにて昼食、小憩後降雨激しきたため車中より春日神社、公園などを廻り京都に至り国際観光ホテルに入る、今西錦司、正垣幸男、岩坪五郎、平

小方諸氏の案内にて二条城、東本願寺、三十三間堂見物、三十三間堂にては跪座礼拝す、午後一時半、京大各位の見送りの裡にはとに乗車帰京す。

テンジン・ノルゲール氏の関西の旅

植 有 恒

九三、桑原武夫、津田周二諸氏等はじめ会員各位五十名を超ゆる盛況、帰途今西寿雄氏の案内にてメトロに立ち寄りテ氏踊る。新大阪ホテル泊。

二月九日

雨、この日は梶本徳次郎、津田康祐、今西寿雄、中島治一郎(今西氏女婿)、住吉仙也、小方全弘諸氏案内に立たれ、毎日新聞社及び今西氏提供の自動車

井一正諸氏出迎えらる、午後六時京都大学学士山岳会主催の招宴に料亭つやに行く。今西会長、桑原武夫、四手井綱彦諸氏をはじめ会員各位二十名ばかり参集純日本式の料理、舞踊などの饗応をうく、同会よりチョゴリザ、サルトロ・カンリ、ノシヤック登頂の三書を贈らる。

二月十日

小雨、早朝より岩坪、平井、

た範圍においてテンジン氏の話しの大要を書きとめておこう。エヴェレストをはじめインド隊の今年のエクスペディションについてはまだ決定しておらず、ドイツ、オーストリアのエヴェレスト遠征もまだはっきりしたところまでいっていない。インド隊はニールカントなどへのプライベートなスモール・パーティが出るだけで、十名のインド隊が許可がとれ次第カンチエンジュンガ第二峰をねらい、すでに二名の先発隊がカルカッタを出発したという情報についてはまだ許可があったかどうか知らない。昨年春の大規模なアメリカのエヴェレスト隊は学術調査とクライミングをともに立派にやってのけたのは感心するが、ポーターにボクシスなどはすみずみ物資をつりあげてしまった。しかしアメリカ隊がやったナムチエバザールとカトマンズ間にヘリコプターを利用しての空輸はよい考えである。

ポスト・モンズーンにおけるエヴェレスト登山の可能性は、天候とクレーン氷河の状況による。インドのエヴェレストの失敗は酸素器具の不備によるというが、今後における装備の改良点は酸素器具、スリーピングバック、高所用衣類で、高所用靴はイタリアのドロミテ製のものがとくに優秀である。クレーン氷河の状態は早春ならそれほど悪くはないが、遅くなる五月ごろから次第にクレヴァーシスが大きく開いてくる。冬は極度に寒く氷河雪崩の危険が増大する。一九五〇年十一月、バンダールブンチから戻ってすぐナンガパ

(次頁へ)

ルバットに出かけたが、その時は恐ろしいセラック雪崩に会った。酸素なしでのエヴェレスト登頂の可能性については何ともいい難い。

ダーズリン・シエルバは全部ヒマラヤン・ソサイティに登録されていて、以前のようなトラブルはなく、ガルツェン・ミツチェン、ダ・ナムギャル、アンテンバ、ゴンブ、ゲンデイなど有名なシエルバが十名現在、ヒマラヤ登山学校のインストラクターになっている。登山学校は八コースあり、一コースが一週間といういそがしきで、この学校はまたインド国境警備隊員養成をかねた重要性を帯びてきている。女子コースもあり、誰でも少額の授業料で入学できる。

ヒマラヤ登山において最も重要な点は、メンバーシップが第一、次が優秀なリーダー、第三がお互いの協力ということ。日本隊はヒマラヤで多くの経験をつんでいるので、私からとくに将来へのアドヴァイスということはないが、小さな遠征を多くやり、そのつみ重ねの上に大規模な隊を出すということが一番大切ではないかと思う。今後の日本隊の成功を期待する、とテンジン氏は話を結んだ。

そのほか吉沢氏の質問に答え、エヴェレストのチベットの名チヨモルンマはネパール名シャカルマタ(SHAKARMA) ということ。一九六〇年の中共隊のエヴェ

レスト登山については、はっきりしたことがわからないので、私からは何も申し上げられないと答えたい。これはいつも受ける質問なのだろう。(昨年九月、アメリカ隊のサミッター、ゴンブが東京に立ち寄ったときこれを聞いたたら、ゴンブははっきり「アイ・ドント・ビリーブ」といっていた) テンジン氏から日本のエヴェレスト隊についてメンバーなど質問があり、四時過ぎ散会した。テンジン氏の口からじかにエヴェレストの話が聞けたのは大きな収穫であった。つづいて午後六時からの印度大使館公邸における印度大使のレセプションは、大長老の近藤茂吉氏御夫妻をはじめ、またまたにぎやかな顔がそろって盛会だった。

十二日は折井、高橋進氏の案内で買物をし、真珠のイヤリングやネックレス、ニコンカメラなど買い入れ、午後七時すぎから日本山岳会有志によるさよならパーティが湯島天神裏手の光村で開かれた。そして十三日午後二時羽田発のJAL機で一路カルカッタに帰った。いつもひかえ目な態度の彼はどこでも評判がよく、彼もまた日本人はわれわれと同じ顔なので気が楽なうえ、親切だと日本での休日を非常に喜んでくれた。外務省勝田事務官が担当して終始、役職をはなれて御世話をいたゞいたことを特に書きそえておきたい。(一九六四年二月)

=第 225 回=

小 集 会 の 記

(越後支部担当)

中 河 与 一

十月二十三日と二十四日、越後支部のきもいりて長岡、銀山湖小集会が行なはれるといふ。

出発前、私は早朝のラジオでケネディ暗殺のことをきいて衝撃をうけた。その日の東京はスモッグのために汽車がおくれる位であったが、間もなく周囲の山々が晴れて来たもの、清水トンネルをぬけると、またしても気象の様子が変わって雨模様になってしまった。この辺では駅ごとリフトが見え、六日町にはラッセル車が待機しているという有様で、冬に向う北国の心構へが感じられた。

長岡駅につくと支部の人々が駅頭に待っていて小集会のプログラムや地図や記念品を渡してくれる。ここで山形や、静岡、富山の人々とおちあつた。小雨の中を二台のバスに分乗して先づ長岡市西郊の故高頭仁兵衛先生の屋敷跡にたちより、このすぐ後にある大竜山正林寺に詣でた。

先生は日本山岳会創設に貢献せられた人。ここには先生の墓所があり、そこで故人を偲ぶことは今度の小集会における重大プログラムの一つであった。読経が終つて

から雨の中に立って日高前会長が故人に対する感動的な頌徳の挨拶をせられ、つづいて地元の人々や山岳会の各支部長の焼香があった。

寺内は荒れていたが七百年の老杉が聳え、前方には故人が愛したといふ三山や旧邸が煙雨の中にかすんでそぞろに懐旧の念をそそった。

ここで時間を費すこと二時間余、今度はバスで東郊の悠久山の麓を廻って成願寺温泉のあたりでおけると、森立峠(もったてとうげ)にかかった。やむかと思われた雨も相変わらず降りみ降らずみの有様、みな雨具をつけて、めいめい急な迂りやすい道を岩根や木の根をふんで登りはじめた。

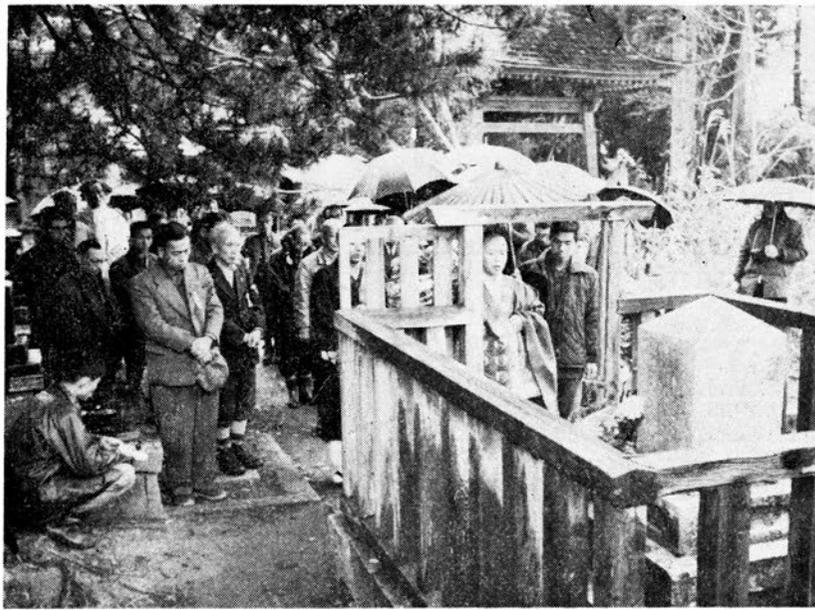
総勢百人近くが前後しながら疎林の中をぬけてのぼってゆく様子は、壮観というか楽しく勇ましかった。間もなく国体までには完成するといふ自動車道路に出たが、そこは泥濘が靴を没し、そろそろ夕暮れてきた道は反って一同に山行の熱意を感じさせた。約一時間で八方台の国民宿舎に着いた。

八方台の夜はゼンマイ、フキ、マタタビ、ワラビ、アザミ、ナメコ、キク、そこへ大きな駄と油揚げという豊富な山菜料理と飲みきれない地酒の歓待で初まった。地元の人々の熱意が感じられた。翌朝はボタ餅の御馳走。昨夜の雨が新雪になって、前方の守門が白くなり、くだりながら見る左側の米山山(よこやま)や黒姫も白くなり、前方には弥彦を越えて佐渡が見渡せた。

麓におりてまた待っているバスに乗った。十日町、小千谷、小出を通過して、昼頃只見川をせきとめた銀山湖のほとりに出た。人造湖をへだててすぐ眼前に白い霧水に掩はれた山がつづいて見える。帰りがけのバスでは小出出身の小島六郎さんが昔の只見川についてマイクで話してくれ、大湯温泉の村上旅館では、小集会のもちかたや、来る団体についての議論が百出し、これに対して渡辺副会長の熱心な応答があった。

小出の町からは越後三山の八海山や中ノ岳や駒ヶ岳が白く雪に掩はれて美しく夕暮れの川の向うに見えていた。小出にて解散。

△参加者氏名▽
日高信六郎、渡辺公平、朝井一男、神谷 恭、木下是雄、野口末延、藤野欣也、小島六郎、村井米子、綱倉志朗、隈部恵子、中 保、中河与一、原田幹市、石原憲治、坂本短祥、浜田文二、(以上東京支部)



——高頭仁兵衛翁の碑前にて—— 1963,10,23 牧野 衛 撮影

牧野 衛 (静岡支部)
 石井貞吉、村上勝太郎、森 茂八、菅
 原 求、豊田春満、斎藤清吉、鈴木康
 義、後藤恵治、後藤幹次 (以上山形支
 部)
 吉川良平 (富山支部)
 藤島 玄、斎藤平七、望月 力、佐藤
 金二、滝沢信三、町野 覚、杉原八百
 樹、早津邦俊、横山雪男、井口正男、
 佐藤俊彦、笠原利雄、石田国夫、春川
 正生、伊倉剛三、花井 肇、倉島正

吉、木村祐三、青木英治、上村伯太
 郎、金山淳二 (以上越後支部)
 奥津五郎、室賀輝男、柳沢一男、土田
 幸雄、阿部 博、藤井 信、清野正
 二、三井秀夫、茨木 弘、徳長 正、
 本間宏之、村田栄男 (以上越後支部・
 長岡ハイキングクラブ)
 △一般参加者▽
 大高二 (長岡厚生会館館長)、岡村憲
 (新潟大学教授)、水橋忠司 (長岡市商
 工観光課長)、山内貞治 (栃尾公民館

長、多田克彦 (同公民館)、星 秀雄
 広沢任一、太田邦介 (以上湯之谷村観
 光課)
 佐藤広文、上村幹雄、半沢友好、大橋
 幸一郎、馬場潤一郎、大味精司、風間
 晴夫、田中崇弘、荒木洋一、桑原忠
 雄、竹沢順一、柴野 実、渡辺 猛、
 小林雅隆、小林俊三、高橋清武、丸山
 和夫、結城 功、三井照代、永井真沙
 子、高田美代、阿部ハル子 (以上、長
 岡ハイキングクラブ) 合計九一名
 (JAC六一名・一般三〇名)

越後支部での小集会

◇…小集会の第一日はあいにくの雨だったが、二台のバスで高頭さんの墓前へ。武田名誉会員が急に来られなくなったことは、山岳会創立の同志として地下の高頭さんも残念がられたであろうが、それでも東京、静岡、山形、富山、地元の方々ら百名近くの多数が墓前に集まったのだから故人も喜んで下さったことと思う。

◇…小集会の夜は、長岡恒例のなごり祭りで銀山平から持ってきたという物凄い山菜のポリュームと、栃尾の豆腐や油揚げがすばらしいものであった。

◇…第二日目、東京組は上りの急行までにたいぶ時間があったので小出の町をあと戻り、伊倉会員の肝煎りで地元藤島、金山、伊倉、室賀その他の諸氏と歓談した。この小集会の大成功だったことこんな会を今後ももちたいこと、そして最後には担当する支部の人たちの御苦労などを語りあった。支部の各位に心から御礼を申し上げておく。(渡辺公平記)

素人画家の出品を待つ

「山に登るものが描いた山の画の展覧会」開催

最近ルームでの話題に、会員で山の画をかく素人天狗画家の自慢話しがにぎやかにのぼっております。おそらく誰もが自分一人の楽しみとして彩管をとりあげたのでしようが、作品がたまたたり、思わざる出来栄に接すると誰かに見せて、ほめられたり、けなされたりしたいものだそうです。そこで我れこそはの連中の作品を一堂に展示し、胸のすくような悪口を言いあってみてはどうかとなり、別記の通りに新緑に映ゆる日比谷公園の画廊で展覧会を開催することに致しました。この画展開催に際し会員の中の画伯の方々も御協力下さることに、数点を御作を賛助御出品下さって錦上添花を添えて下さいます。

高出品画につきましては、作品買上げ申込みも相当あることが予想されますので、本展覧会といたしましては、その売り上げをそっくり本会の中に設けられました「自然保護委員会」の活動基金の一助として寄贈することに御賛同願いたく存じます。

われ一人の楽しみに書いた画が売れて、買った人を悦ばせ(・)その上に自然を護るために役にたつと云うことは山岳人として本懐これに過ぐるものはないことと信じます。

何卒ふるって御出展いただき度く御案内旁々御願ひ申し上げます。

- 一、会 期 五月十二日、十三日 十四日
- 二、会 場 日比谷公園画廊
- 三、出品点数 一名三内外
- 四、画の大きさ 十号以内額装のこと
- 五、画の種類 油、水、日本画
- 六、出品費 一名千円
- 七、搬 入 五月十日迄にJACルーム
- 八、地方からの送料 各自御負担下さい。それ度くその際は御希望により額ぶちは貸額を会にて都合いたしますから送だけお送り下さい。
- 九、目録印刷の都合上出品点数、題名、大きさ等を四月十五日迄に御回報願ひます。

世話人 辰沼 広吉
 交野 武一
 山下 一夫
 松方 三郎

◇第19回国体新潟県予選登山
 第19回国体山岳競技は、来る6月6日(11日)まで本県下国立公園飯豊連峰を会場として開催されるので左記により大会出場選手を決定したい。

- ①期日 3月21～23日
- ②参加資格 飯豊連峰・二王子岳は果山岳協会にて照会されたい
- ③参加資格 以下省略——詳細

主催一 国体新潟県実行委員会、国体山岳競技実行委員会、新潟県教育委員会、新潟県山岳協会

黒部の今と昔(上)

— 三水会講演 —

冠 松次郎

わたくしの黒部の履歴書

古いお話ですけど、一応私の黒部の経歴を申し上げますと、明治四十四年の夏、白馬から道のまだ出来てない祖母谷を下りまして、祖母谷温泉へ行って泊った。八月でございます。その前の月の七月に本会の先輩の高野鷹蔵、北沢基幸のお二人が細野の夫婦をつれて祖母谷を下ったのです。ところが祖母谷の左岸を行けばよかったです。ところが右岸を行かれた。それでエライ目にあつて、途中で祖母谷の一番悪いところですね、両側がカベでせまいところで行きづまってしまいました。おまけに風雨になつて、大きな石の下へみんなでしゃがんでいたらしいですね。それで祖母谷へはその翌くる日かなりおそくおつきになった。疲労困憊なすつて、写真機なんかレンズだけ取つて、あと石の上へおきっぱなしにして、そしてようやく祖母谷へおつきになった。私のはその翌月(八月)だったんです。そのとき高野さんのつれて行った丸山広太郎というのがやはり一緒に行つて、それが祖母谷温泉でどういふ風に行つたらいいか聞いていたものですから、私のときは左岸を行きました。白馬から清水平へ出て、そして祖母谷の左岸をずっと下りてきました。「セト」というところはせまい廊下みたいなところで悪かつたんですが、それを中心に急な草ツキが多くなり難渋いたしました。

さて祖母谷温泉へ下りて、それから黒部の話を聞いたところが、ケキ平まではどうやら土地の人も行けるが、それか

ら奥へは全然人が入らない。行くのには余程の仕度をして行かなくちゃとても行けないでしょう、という話でした。それからすぐごと戻りました。それ以来どうかして黒部へ入つてみたいと考えて、今日ですと問題じゃないんですが、立山山脈と後立山山脈を約六、七年ぐらい山の上を歩きました。結局立山の上からすぐ下に真青な淵が見えたのを見て、御山谷を下りてその淵のところへ行つた。それがあんまり人入っていないかつた最初の「黒部」だと思つてあります(大正七年)。

しかしその付近はですね、大町の品右衛門あたりが「平」にしまして、魚釣に内蔵之助谷くらいまでは下りたらしいので、だから魚釣は入つて居ります。けれども登山人としては恐らくはじめてで、御山谷を下りて、立山を見て、森林の立派なのを見て、流れのキレイなのを見て、もう私どもはとてもいい気持ちになつちやつて、御山谷の花崗岩の州が、銀の砂でも撒いたように美しい、そこへ天幕を張つて丁度二晩とまつて、上流は平まで、下流は内蔵之助谷の上手まで下りて、今度は御山谷のタンボ沢を上つて立山のカール、猿股のカールから室堂へまた戻つたのであります。

その前に(大正四年)、剣の平蔵谷を下りまして、針ノ木峠を越したことがある。それから大正六年には、早月川を上つて早月尾根を上り、剣越えをして立山から平

へ下りて、平から東沢までさかのぼつて、赤牛へ登り、それから槍ヶ岳まで、この時分としてはずいぶん長い旅行で十二、三日かかつたと思ひますが、上高地まで出て帰つてきたのであります。

本当に黒部の人跡のまれなところへ行つたのは、大正七年からであります。それが病みつきになりまして、大正九年には下の廊下へ入つてみようと思ひました。

— はじめて下の廊下へ入る —
そのときには平から下りて、中ノ谷、御山谷、御前谷—いまエン堤のできているところですね、—それから内蔵之助谷、ここで谷がぐつと曲がつてまして、そこから廊下になる、その時分の五万分の地図には内蔵之助谷の上手の本流に滝のマークがある。それを目標にして下りたんですけれど、下りてみたら滝はなかつた。とにかく内蔵之助谷が黒部へ落ち込むのがよく見えたのであります。そこで急に曲がると赤沢の赤い直壁と、丸山の岩壁と、大タテカピンの壁とその三つが非常にせまくなつて、いまはもう高いところへ道ができてますからなんでも高いんですが、谷通し行く場合にはかなり困つた。

そのときにはまだピッケルはなし、金剛杖で、油紙のテント、綱は細引のすこし太いやつを持って、内蔵之助谷の入口で三回ばかり綱を使ってそして廊下に入つた。

その時分の内蔵之助谷から廊下へ入るときの気持つてものは非常に幽スうつていか峯組つていうか、三方壁が高くつて内蔵之助平の窓だけがやや明るくて日がさし込んでいたのであります。それからずつとナル沢の落ち口から新越沢の落ち口まで行つ

て大へズりを、いまは棧道ができています。が、二十四、五回細引綱を使って上つたり下つたり、そして今度はその先きは真直ぐなんです。屏風岩で行きづまつていると右側に非常に美しいトロがある。静かに流れて、川幅が広くなつていゝ。私は長次郎と行つたんですが、ここを行くよりほかに方法がない。それから谷へ入り対岸へ渡つたんであります。中流へ行きますと、だんだん深くなつて、しまいに顔へしぶきがかかるようになる。それで冷つとしたんですが、そんなに長い間ではなくて長次郎と金剛杖を組んで向う側へ渡つて野営して、こんどは下へ下りようと思つた、ところがやっぱり下は直壁で、今度は両岸とも壁になつていて下りられない。壁をはい上つてまた下流の方へ行こうとしたのですが、食糧はなくなる、天気は悪くなつて風雨の中を岩小屋沢岳の西の二、〇六七米の大きな高原状の山がある。そこまではい上つて、そしてそこから岩小屋沢岳へ上り、扇沢を大町まで下りてしまつたのであります。大正九年です。

— 大正十一年、下流から溯る —

そのつぎが大正十一年、こんどは下流から上つて仙人谷まで来て、そこから奥へは入れない。いま爆破して道ができて居るが、南仙人の岩壁、黒部の一番悪い壁がずつとつづいて居ります。今日おいでになつてもいまの爆破した道をお歩きになるとよくわかると思ひますが、悪い壁が連続して居ります。木暮理太郎さんと中村清太郎さんとおいでになつたときですね、そのときは音沢村の助七をつれて行つたのであります。助七は黒部の平まで行つたことがあるなんてホラを吹いたらしいのですけれど

ど、やはり行けないものですから、仙人谷を上って立山の方へ出た。

私もそのときどうしても通れないので、仙人谷を上って梯子谷を内蔵之助平へ出て、黒部別山を見て、そして内蔵之助谷を上って御前谷へ乗越して、猿又のかールを見まして、室堂へ出て、剣へ行ったのです。

—◇大正十三年、上流から◇—
大正十三年には双六谷を上って、黒部の上の廊下を下りて、赤牛岳から平へと出ました。そのときに岩永さんと最初に一緒にになりました。

で、まあ下の廊下へ行つたところが、良い渡渉点は水が多いので全然渡ることができないのです。それから戻って仕方なく立山川を下って早月川の方へ出ってしまったのです。

—◇大正十四年、下流から◇—
大正十四年には鐘釣から樺平までそれから奥鐘山を対岸に見て、立山側をずっと上った。

そのときに水力電気がいまの南仙人の直壁のところではなく、反対側へ乗越をこさえた。サクロウ越と云っているが、作郎ってのは音沢村（いまの宇奈月市）の山の人の名で、そこを切り開いた人夫の名です、それに廊下の廊の字をあてて作廊と云っている。

ちょうど樺小屋沢から四五丁下の岩石の積んである段丘がありまして、そこまで道ができています。その先きは全然道もなかったのですが、ザイル、ピトン手製の棧道、梯

子などのご厄介になって、とにかくいまの十字峽まで潮りました。白竜溪はどうしても通れない。とうとう白竜溪で退却して山を上って高回りをして、上手に出て平まで行き、大体これで下の廊下を中心にした黒部はわかったのであります。



衛野牧 1963.11.20 冠氏を囲んで

太を積んで道をこさえたのです。それができてからはじめて上流との連絡がついたのです。昭和四年十月の末です。
とにかく今日じゃ何でもないんですけれども、水力電気でもなければとてもあいうところへは行けないのです。

—◇上の廊下、黒部の支流◇—
上の廊下へは大正十三年と昭和三年に行つて、それからあとは支流の剣沢とか黒薙川、それから樺小屋沢、内蔵之助谷、御前谷、赤沢とか、そういう支流をコツコツと歩いて廊下の壁も幾たびかは下つたり、はい上つたりしました。しかし考えてみると非常に悪いところほど安全なんで、そういうところはなるだけ時間をかけて、日数にこだわらない。半日空身で先きを見に行つて、そして戻って天幕につく。翌くる日はその半日行つてまたいいところにつく。そんな風にして下の廊下もようやくやったわけなんです。

こうして昭和十年ごろまでは支流を方々歩きましたが、なかで黒薙川と剣沢とは実に立派な谷で、まだ今日も道ができて居りません。これから開拓の余地があると思えます。

まあこれが私の黒部を歩いた概略なんです、その間いくたび歩いたか、文部省の撮影班とも行つたりしました。

黒部の今と昔

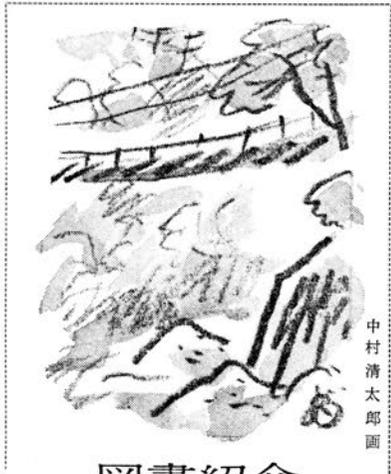
それから今日の黒部はどんなか、というと、これは皆さんご存知だと思つて、宇奈月までは電車、それからケヤキ平までは軌道で、そこから約五百米のエレベーターで以て千米のコンターに沿って奥へ道が入っている。それが仙人谷の取入口まで行つて居ります。仙人谷と東谷のいまの第

四発電所の間は実に近いのです。で、第四発電所の上からインクラインが百米あって、それから黒部ルート、私たちが一週間も十日もかかって行つたところをすね、一時間四十分で赤沢のダムサイドまで行つちやう。実にエライものです。中には蛍光灯がすっかりついて、大町からでは一時間かからないでしょう。そのダムサイドから先きは東沢落口のそばまで約十五キロ近く池になって、いま水をたたえています、それから上流、上の廊下までは全然道もない、人もそう沢山入りません。

いま黒部市というのは、もとの三日市町のことで、宇奈月ってのは原っぱだった。草の原っぱの丘で小さな湯小屋があった。土地の人が夏になるとそこへ入って、歌でも唄って遊んで行く。冬になるとサルが湯小舎のまわりへ出てきたりする、熊なんかも迷いこんでくる。そんなところだったんです。私も泊からガタ馬車で愛本の橋まで行つて、それから歩いたんです。ずい分日数もかかるし骨も折れたようですが、しかし黒部の立派さは圧倒的だった。黒薙川の落ち口なんでものは実に幽スイであそこへ行つただけでもうこれからいよいよ黒部の奥へ入るんだなってえ、なんとも言えない奥深いしつとりとした気持になったのであります。(以下次号につづく)

▲編者付記▼

本稿は、昭和三十八年十一月二十日、東京支部三水会における冠氏の講演をテープで採録したもので、講演時間約一時間半、終つてから質問応答があり、大先輩を囲んで終始和気あいあいとした集まりであった。当夜の参会者四十名、司会は中保氏。文責編者。



中村清太郎画

図書紹介

帝の専属写真家
ピソソ兄弟が写
真撮影を目的と
して最初のモン
ブラン登山を行
ない、三枚の写
真をとって意気
揚々と下山して
くると、初代テ
イラがすでに七
枚の写真をとっ
ているのを見て
ぐうの音も出な
かった、というエピソードが記さ
れている。

図解コーチ、冬山

芳野 越夫 著

昭和三十八年十二月五日新潮社
発行、千五百円。

(山崎安治)

後に著者は、つねにパイオニヤー
の精神を維持し、眼を開くだけで
なし、心を開いて山をよく見つけ
ることが大切だと結んでいる。
レビュファの著作では、訳者に
よって日本で紹介された五冊目の
作品だというのが、山の写真文集と
してはまず一級品といつてよろし
かろう。

天と地の間に

G・レビュファ 著
近藤 藤 等 訳

見事なアルプスの写真集である。
一九六一年イタリアのトレン
トで開かれた国際山岳映画写真コ
ンクールでグラン・プリを受賞し
た同名の映画を製作したとき、ピ
エール・テイラがとった写真をも
とめレビュファの随想と映画の解
説をつけて一冊にしたもの。

第一部に相当する「天と地の間
に」という随想の中にレビュファ
は、ピエール・テイラの曾祖父に
までさかのぼってその生い立ちを
述べているが、曾祖父のジョセ
フ・テイラが十九世紀の中ごろ
シャモニで穀物倉を最初の写真の
アトリエに改装し、はじめて山岳
写真の撮影を行なった話などたい
へんおもしろい。一八六一年七月
二十五日、時のナポレオン三世皇

二代目ジョルジュ・テイラ、三
代目同じくジョルジュ・テイラと
いずれも山岳写真を業として四代
目のテイラにバトン・タッチさ
れ、しかもすぐれた登山家として
今日に至っているという。ついで
レビュファはまる二夏、それぞ
れ四ヶ月がついやされたこの映画
撮影の苦心を物語っている。

「映画の解説」は本書の主題と
なるものだが、山登りのはじまり
から語りをはじめモンブラン、マツ
ターホルン、エギーユ・デュ・ミ
デイの南壁、モンブラン縦走、ド
リュの南西岩稜の山登りのさまざ
まな物語りを写真にそえて美しく
展開している。自然の美しさ、山
登りの楽しさ、仲間との友情―こ
れらがたくみにミックスされ、私
たちをモンブランの氷と岩の世界
へさそいこんでくれる。そして最

後に著者は、つねにパイオニヤー
の精神を維持し、眼を開くだけで
なし、心を開いて山をよく見つけ
ることが大切だと結んでいる。
レビュファの著作では、訳者に
よって日本で紹介された五冊目の
作品だというのが、山の写真文集と
してはまず一級品といつてよろし
かろう。

挿画を豊富に使用した、文庫本
型のハンディな冬山技術解説書で
ある。冬季登山の心構え、冬季登
山の準備、冬山の気象、積雪と雪
崩、冬山用具、食糧、氷雪技術、
雪中露営、冬山の医療、登山計画
の立て方、遭難対策、冬山に登る
人のために、の十二章にわかれ、
ていねいに冬山登山技術が述べら
れている。著者は第三次南極越冬
隊員で、日本山岳会東京支部の技
術講習会では、中心となって活躍
しているメンバー。ヨーロッパ・
アルプス登攀の経験もあり、それ
らの経験がよく本書に生かされて
いる。トレーニング計画の中で、
各年度の登山基準をいちおうあげ
ているのも、初心者にとっては親
切だし、気象、積雪と雪崩の項
も、わかりやすく、しかも正確に

西岡さん

さようなら

吉沢 一郎

西岡一雄さんが、昭和三十九年
二月六日の早朝、七十九才の生涯
を安らかに閉じたという。誰が受
けた感じも同じではあろうが、鶴
のような西岡老には、あの凛々乎
という言葉が、一番当てはまるの
ではあるまいか。

昭和五年の頃には、西岡さん店
(好日山荘)は、堂ビルの筋向い
の大貯ビル(現協和銀行)にあっ
た。裏から入って狭い急な階段を
二曲りすると、右手にJAC関西
支部のルーム、その前の左手の雙
の寝床みたいに細長い部屋、それ
が「好日山荘」だったのである。
狭いところに足の踏み場もないほ
ど、スキーやビッケルや輪カンが
並べられていた。

私自身は余り品物を買ったこと
がないから、店にとっては大事な
お得意でもなんでもなかったが、
こちらは大阪、神戸時代はいうも
更なり、関西を離れてからも、関
西へ行けば必ず、あの狭い階段
を登ったものである。

近頃ハヤリの「どうもどうも」
という言葉は、会えば必ず西岡
さんの口から聞いていた。私が

入っていくと、窓に近い方の工作
台兼帳つけ台にかがみ込んでいた
西岡さんが、今にも折れそうな真
鍮の眼鏡を外しながら、こちらに
怪げな顔を向け、「ヤツ、どう
もどうも」と腰を上げ、水ッ鼻
が、白髪まじりのチョビ鬚にうす
く光っていた。

西岡さんがどういいう経歴の人
で、運動具店さんとして成功した
のか、しないのか、そういつた内輪
のことは一切知らない。私は唯、
西岡さんがとても読みにくい字を
書く関西の古い山男であったこと
を知るのみである。いつか私が日
本山岳会の「山岳」の編集をして
いた時であったかと思うが、西岡
さんに「北葛沢廻行」のことを書
いて貰ったことがある。金釘流と
いうのではないが、自己流の達筆
で、何が書いてあるのかさっぱり
わからない。そこで一計を案じそ
の仮印刷屋へ廻してしまつて、ゲ
ラにしてからはじめて、読ませて
貰ったことがある。ゲラを読んで
原文に移るとなるほどとわかる。
その時の原稿は確かとつてある筈
だが、何処に入っているのか、
ゆっくり探せば出てくるかと思
う。

それにしても西岡さんは、誰に
も憎まれなかった、というより
は、誰からも敬愛されていた人
だったと見え、晩年以來ずっと関
西の多くの岳人から、西岡老、西
岡老といわれながら、温かい心

述べられ、装備は著者の専門である無練機について要領よくふれている。

本書の中心をなすのは、氷雪技術の項であり、恐らく著者もここにもっとも力をそそがれたものと思うが、登攀技術と確保技術にわけ、きわめて実践的な説明がよくわしく記されている。キック・スナップの重要性を強調し、その練習法にまで及んでいるのは、従来技術書にまったくみられなかったもので、ひととおりの技術をも身につけた登山者にとっても一読の価値がある。

確保技術についても同様で、これも支部の技術講習会で著者が説明されている正確で、新しい方法が、手ぎわよく記されており、たいへん参考になる。

正しい登山技術を身につけ生涯の登山生活の基礎とすべきであるという著者の意図が、十二分に本書にもらわれている。付録として冬山装備表、登山用語集が付されているのは便利である。

山の素描

昭和三十九年一月十日成美堂書店発行、二一三ページ、写真、図版多数、一八〇円。

人は無論のこと、札幌にしばらく居住した人ならば知っているだろう。まことに、いい人である。

その金井さんが、自分の店の創業何年かを記念して、昭和三十七年の四月から、山の素描」というA5版12頁ほどのパンフレットを出しはじめて、つい最近その第6号(第2巻第3号)が出た。創刊誌名も岡氏が考えたものだし、毎号題字とカットをかいている。

金井さんは、その費用一切を負担しているのだが、秀岳荘の宣伝めいたことは一言半句もしていない。編集者は、道庁林務部で機関誌「林」の編集を担当し、自らも北海道の山にあかるい山口透さん。その編集もなかなかすっきりして、一見してこの道に年季を入れた人であることがわかる。内容は随想、紀行の類が多いが今迄の執筆者27名中、本会々員は加納一郎、伊藤秀五郎、本多勝一、橋本誠二、串田孫一、金光正次、相川 修、深田久弥、藤平正夫、望月達夫の如き人々である。

一読に及ぶたい仁は、札幌市北十三条西四丁目の金井氏宛郵税を添えて申込み送付をうけられるだろう。敢て北海道の山のことに限らず執筆して下さいる仁があれば金井さんも山口さんも喜ぶであらう。この小誌の永く続くことを祈る。

(望月達夫)

足引 第2号

国学院大学体育会山岳部
国学院大学O・B山岳部

創刊以来一年半で第2号が出た。冬の屏風岩第一ルンゼ登攀、三月八ヶ岳立湯川広河原沢奥壁、春の前穂北尾根といった前衛的な記録から、冬のスイス旅行記や、黒部源流地の彷徨記、私の単独行、くろべ・イワナ・雲の平などといった種類のもの。また鳥甲山へ登るという本当は大へん骨の折れる記録の中に含みながら、秋山のさとの考証というさりげない装いをこらした、かなり手の込んだ文章まで、レポートリイは豊富で守備の範囲も広い。

全百十二頁のうち、終り半分くらいは、去る三十七年八月、黒部平の奥で遭難した小池征子部員の遭難記録と遺稿、友情のこもった追悼記で満たされている。遭難した学校山岳部員の山行歴を見たいとも思うことは、入部以後、山行が駈足であり、そして山行の献立がほとんど一定していることだ。わざわざ三十四年のあいだに慌しく、すぎた山の印象を若い人たちはどのように心にとめてこの世を去ったか、それを思うと惜しくもあまり、痛ましい気がする。

巻末に27年〜37年までの部の合宿記録がある。(F)
昭和38年4月10日発行、非売品、発行者大橋晋、編集者貞安道男

で遇されていたことは、はた目でみても羨しい実に有難いことであつた。

昨年の五月十四日、まだ少し寒さを肌身に感じる宵だったが、日本山岳会の関西支部総会に出席した時、珍らしく西岡さんも老軀を要用の杖に支えられながら見えられたが、その時の握手が、私としては最後のものとなった。(三九・二・二四)

吉田翁の想出

瀬名貞利

吉田竹志さんが昨年の暮におなくなりになったことは一向に知らず、一月十一日は土曜日なので図書室に来て署名簿を開いたら横さんのお名前があつたが岡氏は居られなかった。そして事務の吉野さんから「今日は吉田さんの告別式があつて横さんも神谷さんも弔問に行かれたのだ」と聞かされてびっくりした。そう云えば吉田さんは大分前から土曜会に来られなかったが、私は勝手に「寒い時ではあり身体にさわるのを用心して来られないのだろう」と思つて居た。この署名簿では七月十三日に来られたのが最後になって居る。土曜会の御常連には八十才以上は大先輩もあり七十才以上の人

分余生を楽しまれることと思つて居た折柄誠に残念であり哀悼の念に堪えない。

私とは歳も職業も大分違うのが方々の山岳会でよくお会いした為にかなり昔からのお付き合いである。然し登山にお供したことは一度もなかったから氏の腕前いや脚力の方は知らないが、こつこつ方々の山々に登られたらしい。近頃は平常殆んど山に行かないが、夏は必ず一度は尾瀬に行くのを楽しみにして居られたようだった。

それより私が敬服して居ることは、氏の読書慾の旺盛なことで以前から登山関係の書物をよく読んで居られたし、戦後本会のルームに現われるようになって必ず何か書物を持参され話相手が無ければひとりで黙々と読書に耽つて居られた、また何か山の新聞書が現われれば紀行随筆の別なく、必ず購入された。あの読書力は十年以上歳下の私が及ばない程であつた。

また本会の会合には勤勉に出席して講演やテーブル・スピーチを熱心に聴いて居られた。こんなことを云うと失礼かも知れないが、商人の御隠居としては非常に高尚な趣味を持つて無欲で恬淡に暮して居られたことは感服の外はない。衷心から御冥福を祈つて纏筆する次第である。妄言多謝

(三九、二、一)



中村清太郎画

会員通信

西イリアンの旅から

加藤 泰 安

を作る知恵がないばかりでなく、機材道具がないためもうろうと思えます。

長らく御無沙汰致しました。エナロリタ出発以来、四十日目に中央山地を縦断してスカルノ峯登山の根拠地ベオガに着きました。最初の予定では、十七日目に着くはずでしたが、輸送人が弱いのと人数が集まらぬため大変困難しました。

途中であまり日数がかかりそうなのでベオガを経ずショートカットのルートに変更して、山の麓まで着きましたが、最後の部落と知られていた部落が、最近戦に敗れ四散して、食料も人夫も集まらず、再び山を越えてもとのルートに帰えたりして実に長い旅でした。

これでやっと目的の山の麓に辿りついたわけです。道中縦断して来た山路は物凄い悪路で、おまけ

に毎日午後になると雨が降り、泥んこの行進でした。道もジグザグで登るのではなく、全部直登降でトラバースなどはほとんどありません。これはただジグザグ

です。毎日毎日の歩行距離は短くさほどにも疲かれませんが、健康状態も非常によく、まだ一度も病気にせず元気でおります。今日まで実距離約300kmほど歩いてきました。これからの予定は当ベオガから約二十日の予定でスカルノ峯を登り、二月末にベオガに帰えり、ここには飛行場がありますので、飛行機でコタバルを経てジャカルタに帰えることになり

ます。二月末帰京の予定は三月二十日ごろになると思います。本日急に飛行機が来てすぐ飛び帰えるため詳しく書くひまがない。乱文で失礼ですが御判読下さい。予定がおくれたことを申し訳ないと思っております。

(二月八日、ベオガ・キャンプにて 伊集院虎一あて第二信)

〆編者付記

インドネシア国と合同で西イリアンに遠征中の加藤泰安氏一行(京大西イリアン学術探検予備踏査隊八名)は、三月一日、午後二時三十分、日本側三名、インドネシア側三名の登山班により、ニニギニアの最高峰スカルノ峯(五〇三〇米)の登頂に成功し、三月二十六日羽田着帰国した。

テンジン氏関西訪問の旅に同行して

小方 全 弘

日光で、スキーを楽しんだテンジン氏は、来日したときよりも、若干、日焼けした温顔を大阪に現

山の隠戸

坂倉登喜子

鹿島槍から戸隠山へ、冬山合宿の場所を変えてから、二度目の新春を迎えたが、どうやら今冬は牧場から一不動にとりつき高妻山へ登れたという報告を受けた。

去年は雪が深くて駄目だったが今年は幸に雪の状態が調子よくて殆ど人の入らない静寂な高妻山頂が踏めたので、今度は戸隠奥社から八方覗の岩稜を登ろうということになり、私も久しぶりに去る二月二十一日から二泊三日の合宿に参加した。

長野駅に早朝着き、一番バス(七時)に乗り、宝光社を経て戸隠中社まで入った。中社から戸隠牧場方面のスキー場へ行く人達の姿が消えると、大型キスリング重装備の私達五人だけの踏む雪のきしみが、朝の雪径に心よく響いて、信濃の雪質の良さに喜び合った。

バス道から外れて林の中の近道に入ると雪が深くなって、荷が重いため不規則に足が沈んでつぼになるので、ワカンをはいておいらん道中を続け、奥社入口鳥居前まで歩いた。

奥社の境内は雪崩のおそれがあるので、鳥居横の林の中に頌合のテント場を見つけて、雪を踏みかためてテントを張ったのはお昼近かった。

幸なことに牧場方面から流れてくる水場が近く、入口の一軒家のトイレが使用できる、好条件に恵まれた生活が始まった。パン食の軽い食事を済ませ、第一日はワカンで奥社まで往復することにした。

途中立派な杉並木の静けさの中に、木つきの連続音がコツコツコツコツと聞こえて来て思わず立止る。山門をくぐってゆるやかに登ると、すっかり雪に埋まった奥社殿が雪崩を防ぐためか嚴重な板で釘づけにされた。

ここで一休みした後、左側の谷にいつたかすかなトレースを辿って尾根までの道を偵察したが、雪が深く急斜面のため、わかんの足どりはあまりスムーズにいかなかった。

夕食時間までに戻るため、尾根を確認して、急な降りをラッセルしながら、少し水り始めた杉木立の参道をテントに戻った。夕食後夜行の寝不足を挽回するため早い目に寝袋に入る。靴を氷らせないようにシュラフに入れてありっただけの衣類を着て眠りについた。

わしたのは、二月七日の夜である。第二ごまで、横名誉会員につきそわれたテンジン氏は、マナスル初登頂者の今西寿雄会員らの出迎えを受け、黄色のスキー帽に、レイン・コートという軽装であった。折から週末でもあり、大阪駅は、スキー客でこったがえしていたが、日本のスキー人口には驚嘆したらしい。「スキー、スキー」と連発していた。

以後、十日のはとで京都を発つまでの間、関西支部の方々の、心のこもったもてなしと案内にすっかり感激し、関西旅行を十分に楽しむことができた。

テンジン氏の関西旅行の日程から主だったものを拾い、彼の関西での印象を記してみたい。

新大阪ホテルで、関西の第一夜を過ごしたテンジン氏は、関西支部で作ってくれたスケジュールにしたがって、森永製菓、ダイハツ工業などを見たあと、宝塚の少女歌劇を見物した。宝塚の美女たちに、とりかこまれて花束を受けるときは、さすが、エヴェレストの英雄も、ちよっとばかり面映ゆげであった。

夜は、関西支部の晩さん会に出席し、その折の堂々たるスピーチは、世界各国を歩いた彼のキャリアを物語っていた。また、その後、東洋一といわれている大キャパレーで、ホステスとダンスを楽しむ姿は、洗練された紳士のそれ

であった。

九日の日曜日は、大阪城をスタートに、奈良から京都へと廻ったが、東大寺の大仏は、テンジン氏にとつて、もともと印象が深かったようだ。大仏の前に額突いて三拜するテンジン氏の姿を見て、彼の信仰に対する真摯な態度にうたれたのは、私だけではなかったようである。「私にとつて、もっとも幸福な日」といつまでも繰り返していた。

奈良から京都へのドライブは、折悪しく降り出した強い雨のために、余り快適なものではなかったが、夜は、AACKの招待を受け、舞妓はんの優雅な舞い姿に京の夜を楽しんだ。AACKでは、チヨゴリザ、ノシャック、サルトロ・カンリの写真集を、各隊の隊長とサミッターが、署名して贈った。テンジン氏も、カラコルムには行ったことがあり、いつまでも話はずきなかつた。

最後の日は、時間もなかつたが、二条城など、いくつかの名所を見学し、今西錦司会長をはじめとするAACKの人たちの見送りをを受け、名残り惜しそに車中の人になった。

大体、主なところは、以上のようなものであるが、私などからみて、少し、ハード・スケジュールと思われないでもなかつたが、いささかも疲労の色を見せず、終始、あの親しみ深い笑顔が消さな

かつたあたり、さすがエヴェレストの勇者であり、一流の紳士であるとは、私だけでなく、テンジン氏と親しく話し合った関西支部の人たちの一致した意見であつたようだ。

帰国ごあいさつ

謹啓、厳寒の候益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本遠征隊は昨年七月神戸出港以来種々の困難も御座居ましたが、十月二十一日サイバル峰の初登頂、未知の世界である西北ネバールの横断調査等数々の成果を収めることが出来ました。正月二日横断隊の帰国をもって無事計画を全う致しました。これもひとえに各位の暖い御支援の賜と深く感謝いたしております。

早速拝眉の上御礼申し上げるべきところ取敢えず書中をもって御挨拶申し上げます。

昭和三十九年一月七日

同志社大学ヒマラヤ遠征隊

隊長 児島勘次
副隊長 平林克敏
隊員 福田勝一
松村多四郎
佐藤和男
岡田啓二郎

× ×

✓ンとする程静かだった。

翌朝 TENT を六時出発のため、食当は五時起床、朝食は鳥ぞうにトシヤレて、テルモスに紅茶を入れ、昼食とビンチ袋をサブに入れて、アイゼンをつけ出発する。

昨日歩いた奥社まで三〇分の道は夕べの降雪でトレースは消えかけていた。奥社で一休みの後愈々尾根への登りにつく。

雪はそれ以後意外に深く、トッブを切る根本会員は尾根を外さぬようにラッセルの行進は相当のアルバイトだ。

梢についた雪花が時折吹く風に舞い散って、美しい風花が飛ぶ中を左へ捲くように登ると、岩のフーバーハンクのように五十間長屋につく。右側の岩峰が突出しているのが雪が小さく雪崩れて、トラヴァースする足下の安定があまり良くない。アイゼンに雪がついて固まるので安全を期してこの付近からザイル確保で前進することにした。時折スノーボールが岩峰から落ちて左斜面に不気味に落ちていく。雪が落ちた斜面は雪面が軟かく深く、誠に歩き難い。

やがて四十分程かかって百間長屋を過ぎ、岩峰を一廻りした所が丁度三分の二位の高度の西くつという岩場のオーバーハンクした岩の下で、真正面に西岳の立派な姿が鋭い雪ひだを輝かせていた。

私達は時間的にここから先の登攀に無理を感じたので、二人だけを前進させるよう鈴木チーフと私が残り、二時を約して別れた。西くつの岩の下から真青な空を仰いでいると、時折吹く風に又風

花がさらさらと舞い散って実に美しい。太陽にきらめく雪片のなんという麗わしさだろう。

雪の中に在る自分の体と心までが純白で清潔になっていくような気持ちになった。

冬芽に包まれた木の芽が雪の中から先だけ頭を出して、早春の兆を見せつける。

約束の二時が来ても帰って来ないので心配していると、漸く三時近くサインをかけて来た。

飛び立つように仰ぐと元気にくさり場の鞍部に姿を現した。あゝ無事で良かったとほっとする。

西くつから上はくさり場の鞍部から又雪が深く、尾根に出ると風が強くなり雪が飛んで岩尾根となり登りより下降が難儀だったらしい。

八方眼を目前に一時に急いで引返したが下りが悪く時間がかかったようだ。西くつで一緒になり温かい紅茶で元氣をつけて下山にかかる。

降りたトラヴァースは往路のトレースが消えて、雪がかぶっていたが、足がかりに氣を配りながら奥社に降り、予定より一時間おくられて杉小立の間から夕月が淡い光をなげかける六時頃 TENT 帰着。 TENT キーパー折井嬢の心こめて作ってくれたミルクにほのぼのとした胃袋のぬくもりを覚えて、二日目の夜の安らぎのひとつときを迎えた。

翌朝鳥居前を九時過ぎ出発、八方眼を右空に仰ぎながら、又何時の日にか...と、十時のバスに駆けつけた。



中村清太郎画

一月理事・評議員会

九日・ルーム

▽出席者 松方会長、三田副会長、理事深田、木下、辰沼、折井、山崎、金坂、松田、武藤、竹田、監事野口、評議員藤井、藤島、吉沢織内、永井(大分)、牧野、山本(静岡)芳賀(東京)

▽議事と報告

①富山県登山条例について
・富山県では登山遭難防止条例を立案し、来る二月より実施したき意向で一月二十三日にこれに関し公聴会が開催されるので、辰沼、山崎理事が出席の予定。

②自然保護委員会(仮称)について

・本会間に委員会を設けることについて、交野評議員を中心に立案、企画を進めることに決定する。

③テンジン・ノルゲイ氏来日について

・駐印松平大使より外務省に連絡あり、正式に訪日することになった。本会としては二月下旬より、

約十日間の予定で外務省文化課に招待して貰うように交渉することにした。

④学生部懇親会
・一月十一日より八方尾根にて恒例の懇親会を開催する。O・B各位の参加を願いたい。

⑤登山技術研究会開催について
・例年の技術講習会は三月下旬に奥只見で実施するよう、越後支部とも連絡、技術委員会準備中。

二月理事・評議員会

十三日・ルーム

▽出席者 渡辺副会長、理事辰沼、金坂、折井、古沢、川上、松田、武藤、山崎、木下、高橋、評議員日高、藤島、神谷、藤井、青木、牧野(静岡支部)、飯野(山梨支部)、石原(東京支部)

委任 中島、深田、松本、望月、加藤、藤島、池田、中田、今西

▽議事と報告

①自然保護委員会設置について
・本会内に右委員会設置決定、委員を左記諸氏に依頼する。

委員長 松方会長兼任、委員渡辺公平、神谷恭、武田久吉、藤島敏男、日高信六郎、深田久弥、古沢肇、田中薫、足立源一郎、千家哲鷹、福井正吉、村井米子、交野武一、他各支部長。なお随時適任者を追加委嘱することにする。

②富山県登山条例について
・山岳協会として富山県遭難対策について届出制を強化することに

より協力することにして、本条例は一応取止めとなった。

③エヴェレスト委員会について
・まだ具体的に決定し事項はないが、四月中旬頃までには遠征隊の隊長、規模等について見通しを明らかにしたい。

④登山技術研究会開催について
・期日3月27日〜30日、奥只見共益山の家で実施、越後支部の協力を得て準備中、参加六、七十名の予定。

⑤テンジン・ノルゲイ氏の離日について
・二月二日來日以来、予定の日程を終えて二月十三日(水)午後二時羽田発無事帰国した。

⑥西岡一雄氏(終身会員)二月六日逝去された。

東京支部会務報告

二月五日(水)役員会
一、第九回スキースクール報告
一月十一日〜十五日、山田牧場、参加者 七五名

二、第三水例会の件
ヒマラヤの地区にない山シヤルプ

三、婦人部集會報告
三月四日(水)役員会
一、三十九年度役員推選の件
二、第三水例会の件
未開の地西ネパール
三、第四回登山技術講習会
五月中旬 三日間
於北ア、上高地、岳沢

東京都支部
奥日光のスキー

早川 瑠璃子

● 婦人部 ●

昨年未再発足しました婦人部で二月一日より三日まで、日光光徳牧場の学習院光徳小屋を借りてスキー懇親会合宿を行いました。参加人員十一名、村井米子さんをはじめ中学二年生の小原由紀子さんをまじえて、本当に愉快に楽しく過しました。

なお第二回のスキー山行計画もありますので、今回参加されなかった方々も次回から気軽に御参加なさって下さい。

二月一日 再会の婦人部懇親山行は奥日光光徳小屋で開かれた。東京駅発日光号が同日早朝の国鉄事故にひっかかり一時間遅れで発車、更にいろいろのバス運休と重なって大きく悪作用、乗りつき乗りつきで中禅寺駅に着いたのは昼過ぎ。週末だと云うのに辺りは人影もなく、しんと静まりかえっていた。昼食に中禅寺湖まで足を延ばして、ホット牛乳、ハム、鮭缶、マヨネーズ、小原さん持参の

てんぷらなどで思い／＼サンドウィッチを作ってパクつく。みかんのデザート付。

今回の計画委員でもある山口、杉浦、岡部さんの三方で総勢十一人分の食糧の買出しから運搬まで一手に引受けて下さっている。彼女等の見事にふくれあがったキスリング。思いも浮ばずサブザックでのん気に現われたカンの悪さが申し訳ない。それにしても久びさの(私にとっては三年ぶりの)雪景色であった。紫紺色に広がる湖、風は冷え／＼しているが立木観音に通じる朱塗の橋桁にまつわ雪浮島には何故か春の面ざしを感じさせられる。戻った中禅寺駅で十回近く乗りついで追かけて来られた松田さん合流。三時半やっとならぬ小屋到着。ほどなくして屋

ひと滑りして夕食、二基のランプの下、大鍋二ツにたぎるおでん、とき辛もある。うまい、たねといふ味加減といふ、本職はだしである。それに大根の長時間漬、サクッと来る歯ごたえ、レモンの香もして憎い程の取り合せである。ストーヴの火はますます快調。先住者なく後続も皆無、窓外は何時しかしん／＼と雪が降りしきる。皆いちように顔の筋肉がタ

東京支部
スキー講習会報告
第9回
事業部 安彦六郎

第九回スキー講習会は一月十二日より十五日迄、山田温泉スキー場で行う予定であったが、雪不足のため大型バスを毎日運行して、山田牧場で講習を行った。

今年はず想外に降雪がおそく、志賀、熊ノ湯、野沢、上越、東北とほとんどのスキー場が雪不足のためスキー不可能であるばかりでなく、冬季オリンピック開催地のインスブルックでさえ、雪を運んで来て張り付けているありさまであった。

こうした雪不足な時に山田牧場には二〇センチ余の積雪があり、講習には何等の支障もなく終了出来たことは誠に幸いなことであつた。

毎回そうであるが、今回は特に受講者全体が非常に明朗で楽しくそして常に熱心であった。これは都内の数多くある他のスキー講習会には見られない独特な運営の持味と、確たる役員陣の堅実さによるものである。

スキー技術とは、自己のスピードを常に任意にコントロール出来るようにすることであり、講習とは、その応用の基礎習得である。いたずらに自我よがりたてても

らずに、今後共大いに参加して頂きたい。

次は第十回目となるので、講習を一日きいて記念行事を催したいと思つている。

最後に御協力下さった役員諸兄に深謝します。

役員 関口、加藤(元)、鈴木、中、加藤、大久保、貴井、安彦

受講者 三原哲夫ほか六六名、

▼三水会について

会場の関係で、最近では月例の小集會が休止状態になっていますが、そのかわり、東京支部が主催する毎月第三水曜日の夜の定例集會がルームに於て開かれていきます。ハガキのご案内は、東京中心ですから全部の会員に差上げられないのが遺憾ですが、遠隔の方も「三水」を覚えておいて下さって、ご上京のおついでにお立ち寄り願えたらと思つています。一月は、冬山の収穫を話し合う会をやり、二月は石原憲治、広谷精啓氏を迎えてシャルプ登頂のお話とスライド、三月は東海大学長沢隊長の未開の地西ネパールのお話などでした。

昨秋は冠氏をお招きして黒部のお話を聞きましたが(当日の講演概要は六頁に掲載)、今後も名誉会員その他の方で珍らしい話をお持ちの方にお出でを願つて貴重なお話を聞くことができたらと思つています。

三水会の企画について、ご希望、ご意見をどしどし保までお寄せ下さるようお願いしています。(保)

昭和38年度
登山技術研究会実施要項
主催 日本山岳協会

1 研究課題

- ① 1963年度海外遠征隊の登山報告
- ② 最近のヒマラヤ事情
- ③ 外国の遠征事情
- ④ 氷河上の登攀技術
- ⑤ 八、〇〇〇米峯登山における諸問題
- ⑥ 2期日 昭和39年3月27日(土)30日

3 場所 奥只見(新潟県北魚沼郡湯之谷村、共益山の家)

4 費用 参加者の費用は登山技術研究会委員会で負担の予定。

5 装備 スキーツアーに必要な個人装備(露営・登攀・炊事用具の必要なし)

6 行動日程 3月27日、小出駅前受付バスにて奥只見共益山の家着

あいさつ 榎 有 恒氏

趣 旨 松方三郎氏

△研究会√八、〇〇〇米峯登山における諸問題(辰沼広吉、村木潤次郎)

△研究会√氷河上の登攀技術(金坂一郎)

3月28日 △山行√未丈ヶ岳頂上往復

△研究会√一九六三年度海外遠征隊の登山報告(村木潤次郎)

3月29日 △山行√日向倉山

△研究会√最近の外国の遠征事情(吉沢一郎)

3月30日 山の家—小出駅着解散

・連絡、照会先 日本山岳協会登山技術研究委員会

ルミ笑いが小屋中に充滿する。紅茶、りんごのみかん、コクのある田舎式甘酒の酒盛を最後に九時就寝。

二月二日六時五十分起床、朝食す前に前夜発の富田さん到着される。昨夜からの降雪が加つて一米余りの積雪、小屋裏の恰好の斜面で稼げや稼げと休みもせずひた滑る。三歳児ぬ間に皆さん本当に上手になられ、スイ〜であるのに反して、我がスキー、心はやれど板動かずで専ら大穴製造に精を出していたが、今日の午後までと思えば笑われながらも雪の上へへばりついて離れなかった。昼食は仲々乙な味のするコンビーフ入りラーメン。恥を忘れて三杯目を大声でお替りしたらおまけの半熟卵が載つて来た。食後もまた一段と賑やかな話に花が咲く。J.A.Cから還暦祝に贈られたと云うしゃれた色のセーターを召した村井さんの遠い昔話りの馬ソリの話は、やがて次回山行案(八甲田山)にまで伸展し、話の夢は更にデッカクふくらんで、北海道合宿、私達の小屋を作りたい、ママさん会員のための託児所設立にまで発展した。こんな愉快な集りが今度は途絶えずに息長く活動を続けるように願わずにはいられない。

半数が四時下山。もう一泊される山口、富田、杉浦さんが光徳ロッジ迄見送って下さり、テルモスの熱い紅茶の最後のふるまいに

勢を得て、逆川まで四キロの道を歩いた私達に、またもバス運休と云う裏目が待ち受けていたが、白ナンバーの小父様やお兄様方の暖いお情けに乗りつき乗りつきで日光駅発最終の上野行に乗り込む事が出来た。車中、湯本を一時半に降りた方達と同じ列車と聞いている。今回の山行どうやら最後まで裏目のツキで終わったように思われるのである。感謝。多謝。

▼東京支部婦人部集會報告

三月三日(火)

一、日光スキー合宿報告

二、氣象の話(富田)

新聞天気図の利用
年間モデル天気図

三、装備(1)衣服について (岡部・折井)

材質及び改良点

四、五月スキー合宿の計画
出席者 十七名

◆ 1964年度 = 通常委員会開催通知

◇日時 四月二十五日(土) 午後三時

◇場所 御茶ノ水ホール(日販ビル2階)

◇会長あいさつ ◇一九六三年度事業報告並びに支部報告 ◇一九六三年度決算報告 ◇一九六四年度予算案付議 ◇役員改選

(なお東京支部総会は午後二時)

第 3 回 登山技術講習会 日本山岳会 東京支部

日時 昭和38年11月30日 12月2日

場所 富士山

趣旨 昨年の富士山および今年春の谷川岳における経験を基に、支部会員諸氏に正しい登山に対する智識と、正確な技術を身につけて、安全で楽しい山登りをしていたくことを目的とし、この講習会を開催した。今回は特に実技に加え、登山についての基礎的な問題について講義を行なった。

受講者氏名

岡本竜行、松原貴代司、佐藤行男、畠山 勝、大貫健作、黛 卓郎、石井喜郎、新谷宜雄、池元善秋、大友栄克、細川雅弘、清水勝郎、荻原浩見、宮本重弘、青木 矣、関根和雄、加賀秀男、滝本玲子、近藤育代、折井正子、栗原洋子、秋田しおみ、大野昌子、桧垣 範子、板垣洋子、武田育子、岡部

浩子、折田たか子、森 英子 (以上廿九名)

三〇より、ルームにて 十一月廿六日、実技準備会 一八・三〇 ルームにて 十一月廿九日 体協前集合、二

感想

編成 本部 チーフリーダー 山崎安治 サブリーダー 芳野越夫 技術リーダー 村木潤次郎 マネージャー 鈴木郭之 Doktor 田村扇一 講師(実技) 村木潤次郎、鈴木伊和雄、君島久登、広谷光一郎、須田信弘、菅原省司、倉地 敬、竹内道雄、土肥正彦、姫田克己 講師(学科) 加藤喜一郎、田辺 寿、芳野越夫、田村扇一

十一月廿九日 (曇時々小雪) 三・三〇 吉田口 五合目着、約卅分 飯後の後出発、七・〇〇 芙蓉荘 着、仮眠(一・〇〇) 講習開始、 本年は雪不足のため、吉田大沢七合目およびぶ岩下にて、キックス テップによる登降訓練、および滑 落停止訓練、一六・〇〇 帰着、 夜技術に関する研究会。 十二月一日 (快晴、風強し) 七・一五 出発 第一、二、三、 四、および七、八班はキックス テップを主として練習しつつ吉田 口夏道沿いに八合目、次いで九合 目附近にてアイゼン歩行の訓練。 第五、六、九、十班は七合目付 近にて、アイゼン歩行、滑落停止 訓練を行い、一六・〇〇 帰着、 夜、雪崩を中心とした研究会 十二月二日 (晴) 七・〇〇 出 発、吉田大沢七合目およびぶ岩下 にて制動確保による確保法の訓練 およびコンティニエアスの場合の 確保法について反復練習し、また アイゼンの使用を極力制限して、 安定なる雪上歩行の習得につとめ た。また折にふれ気象変化につい ての実地講義を行う。一一・三〇 帰着、一・〇〇 下山開始、一五 ・三〇 吉田馬返着、直ちにバス に乗車 二〇・〇〇 帰京解散。

東京支部の講習会も今度で三回目、冬富士での講習会は二度目というわけで、手ぎわよく運営されたものと思う。しかし、冬の富士山はいつもくるたびにコンディションがちがうので、計算通りにやるのは、なかなかむずかしいものだ。今回の積雪状態は、十二月の富士としては最悪の部に属したのではないかと考える。とくに五合目から六合目あたりは、下が雨のため凍結し、その上に薄く粉雪が乗っている。始末が悪かった。七合目以上では積雪も多いため歩きやすくなるけれども、雪崩の危険がきわめて多い。この点私も十分に警戒し、二日目は吉田大沢に近づかないことにしたが、果せるかな翌日みると九合目、通称おひたいのあたりからかなりの規模の表層雪崩が出ていた。

Table with 2 columns: 1頁4段 厚生省国定公園部長 同志社大隊 サイバル初登頂; 2頁1段 同志社大隊 サイバル初登頂; 3頁1段 アウトイヤ アウトライヤー; 6頁2段 伊倉剛二 伊倉剛三; 14頁1段 昭等二十九 昭和二十九; 15頁2段 ビックホワ イド・ビックホワ; 15頁4段 上練式 上練式

行動概要 十一月十二日 講義 冬山に対する心がまえ 加藤喜一郎、装備 田辺 寿、一八・三〇より ルームにて。 十一月十四日 講義 気象、積雪、雪崩 芳野越夫、一八・三〇より ルームにて 十一月十九日 講義 冬山の衛生、遭難対策 田村扇一、一八・

細部の技術の講習、その方法などすべて芳野氏以下講師諸氏におまかせしたが、今回のようなコンディションの場合、全体的な危険防止に少なからず気をくばった。当然のことだが、私自身としてもいろいろよい勉強になった。無事に講習会がすんだときは、まったくほっとしたというのが正直なところで、芳野氏をはじめ、支部の皆さん、講師の方々に感謝する次第である。(山崎安治)

津軽不二雄氏の告別式

もと本書記で、病気のため三十一 年六月退職いらい自宅療養中の津軽不二雄氏は本年一月四日逝去され、告別式が一月十二日午後一時から新宿区若

編集後記

▽会報がいつもながら遅れておわびのしようありません、二月月のおくれをとり返したいと思いつながらままなりません▽しかも發送から会員の手元に届くまでの日数を考えると遅れは二月半にもなるでしょう、これでは大ていの記事が旧聞となつてしまひ会報の意味がありません▽それでも関係者は精一杯で、ことに發送は、いつも学校山岳部の諸君の応援を得てやつと助けられてゐる現状です。この陰の力に対しては感謝せずにはいられません▽故高木正孝氏の南太平洋での死亡が確認されたので、会報に追悼記を出したいと思ひ、適當と思われる方に原稿をお願いして御快諾を得、やがて係あて原稿が届けられたので、本号に掲載の準備をしたところ、あとからあの原稿は「山岳」用に書いたのだから返してほしい、と言われて面喰らい、組替えに大慌てしました▽今後、会あて原稿を御惠送のときは「会報」「山岳」の区別を明記していただけたらと思います。

昭和三十九年二月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

發行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円

電話箱田(51)八九五二番

振替口座東京四八二一九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂